

## 世界遺産のまちとして住民主体の歴史的まちなみ保全を目指す

～奈良県吉野町吉野山～

2004年（平成16年）に世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の北の玄関にあたる吉野山は、7世紀、「役小角（役行者）」が開いた修験道の聖地として人々の信仰を集め、その後も、天武天皇、源義経、後醍醐天皇にまつわる、歴史の重要なポイントにおいて舞台となってきた。春には桜の花が山一面を覆う日本一の桜の名所でもあり、豊臣秀吉の盛大な花見も歴史上有名である。

その歴史・文化遺産は今もいたるところで見ることができるが、近年、まちなみの景観悪化や空家の発生、また、少子高齢化の波により徐々に賑わいも低調となり、今一度、住民が、地域の歴史を学び、世界遺産の中に暮らすことを理解することで、住民主体による歴史的なまちなみと景観の保全に取り組み始めた。

### 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」

奈良の盆地部を南に下り、吉野川を渡って紀伊半島の山岳地帯が始まるあたりに位置する吉野山は、古く7世紀から、日本独自の宗教文化ともいえる修験道の霊場として人々の信仰を集めてきた。

吉野山とは1つの山を指す名称ではなく、千メートル級の山岳が続く大峰山系の北端、南北8kmほどの尾根筋がいわゆる吉野山で、修験道に関連する社寺が点在する山地の地域名称といえる。

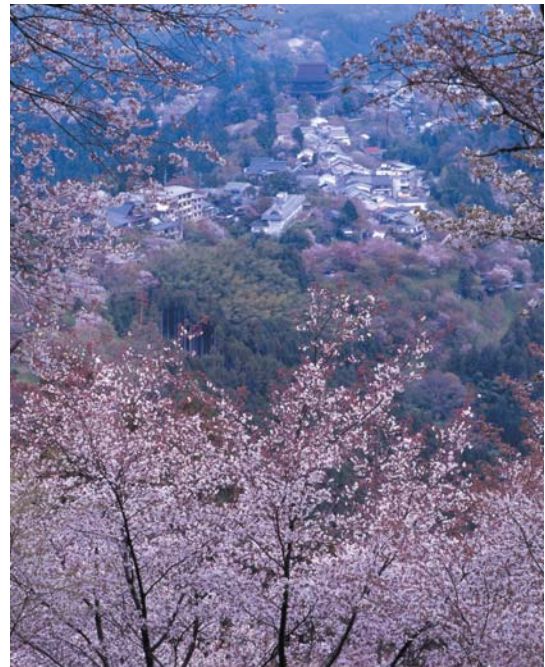
その中心である金峯山寺は、7世紀に活動した山岳修行者である「役小角（役行者）」が開創したと伝えられ、蔵王権現を本尊とする寺院である。

また、吉野山に続く大峯山系を二十数キロ南下すると、山上ヶ岳（1,719m）の山頂近くに同じく役行者を開祖とし蔵王権現を本尊とする大峯山寺がある。

明治維新期における廃仏毀釈までは、吉野山の金峯山寺を「山下の蔵王堂」、大峯山寺を「山上の蔵王堂」と呼び、両者は一体のものであり、「金峯山寺」とは本来、山上山下の2つの蔵王堂と関連の子院などを含めた総称であったという。

国土の大半を山地が占める日本においては、古くから山岳は聖なる場所とされていた。こうした日本古来の山岳信仰が神道、仏教、道教などと習合し、日本独自の宗教として発達をとげたのが修験道であり、その開祖とされているのが役行者である。

平安期には、空海や最澄により密教が伝えられ、真言宗あるいは天台宗として隆盛を迎えたが、と



春には吉野山一面に桜の花が咲き誇る  
(写真提供：吉野山まちづくり協議会)



金峯山寺蔵王堂（国宝）

もに山岳修行を奨励したことから、修験道もそれらと密接なつながりを持ちながら、真言系や天台系として組織化され、さらに信仰を集めることと

なった。

吉野山から大峯山系を経て、さらに熊野の熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）に至る約170kmの山道は、「大峯奥おおみねおくがけみち駈道」と呼ばれ、古くから修験者の修行の道であり、また、天皇、皇族や貴族の参詣もさかに行なわれた。

そして、2004年（平成16年）、この「大峯奥おおみねおくがけみち駈道」とそれに沿った霊場は、山岳密教の聖地である高野山とその参詣ルートとともに、ユネスコの世界遺産に「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録された。

### 日本一の桜と吉野山の歴史

春には山々を桜が埋め尽くし、古くから日本一の桜の名所として称賛された吉野山であるが、その起源は、7世紀の役行者にさかのぼる。

役行者が厳しい修行の末に、感得した蔵王権現を桜の木に彫ったことから神木として大切にされるようになったのが吉野の桜の始まりといわれ、平安期の王朝文学から近代の文学までの様々な文学、また、歌舞伎や浄瑠璃などを通じて賛美されてきた。

約3万本といわれる桜は、山の標高に沿って下千本、中千本、上千本、奥千本と呼ばれ、およそ1ヵ月の間、麓から順に花期をずらして咲き続ける。

また、歴史上の重要な出来事の舞台としても度々登場している。7世紀には、大海人皇子（天武天皇）が吉野山周辺で一時雌伏の時期を過ごし、後に挙兵し天皇位に就いている。

その後、鎌倉期には、兄頼朝と対立した源義経が吉野山に身を隠したが、兄の追討を受け、静御前と別れて東国へ落ち延びて行った。この物語は、後に「義経千本桜」として劇作化され、歌舞伎・浄瑠璃の代表的演目として今も人気である。

1336年（建武3年）には、後醍醐天皇が足利幕府との対立により京都を逃れ、幕府寄りである京都の北朝に対し、吉野山に南朝（吉野朝）を置いた。ここに、南北朝期が始まるが、その後、幕府の圧倒的な軍事力に押され、さらに吉野の奥に身を潜めることとなった。

### 歴史・文化と自然に彩られた吉野山のまちなみ

吉野山のまちなみを貫く尾根道沿いには数々の

金峯山寺仁王門  
(国宝)



吉野山の  
まちなみ



まちなみの入り口に立つ「黒門」

修験道の寺院、源義経が身を潜め後醍醐天皇が宮を置いた吉水神社、静御前の伝説にまつわる勝手神社などが点在し、まちの歴史を物語っている。

また、吉野山の自然は、春の桜に限らず、夏のアジサイや新緑、秋の紅葉、冬の雪と、四季折々の豊さを持つ。

その中で、国宝の木造建築物としては東大寺大仏殿に次ぐ大きさである金峯山寺の本堂（蔵王堂）は、素朴な造りながら、屋根の反りが鋭く切れあがり、鳳が翼を広げた様にもたとえられる優美な姿で、吉野山一帯に存在感を示している。

中世の金峯山寺は山上・山下に多くの子院をもち、その僧兵勢力は南都北嶺（興福寺と延暦寺の僧兵）にも劣らないといわれた。南北朝時代、後醍醐天皇が吉野に移り、南朝を興したのにも、こうした軍事的背景があったという。

最盛期には山下には百数十坊、山上には36坊の堂社が建立され一大宗教的霊域として栄えたが、



転機が訪れたのは、明治維新期の「廃仏毀釈」である。

それまで吉野山には52カ坊あったものが、政府により神社への転換か廃寺を迫られ、13カ坊に減少した。さらに、明治5年には追い討ちをかけるように「修験道廃止令」が發布され、金峯山寺すら廃寺に追い込まれる事態となった。

その後、修験道側からの嘆願などにより、明治19年には「天台宗修験派」として修験道の再興が許され、金峯山寺は寺院として存続できることになった。しかしこの時、山上の蔵王堂は大峯山寺として、金峯山寺とは分離され現在に至っており、吉野山の僧坊も4カ坊まで減少した。

## 観光地としての吉野山の発達と近年の状況

吉野山が再び活気を見せ始めたのは、大正元年、吉野軽便鉄道が国有鉄道の吉野口駅と吉野駅（現在は吉野川対岸の六田駅）間で開業され、関西各地からの交通利便性が高まったことにある。

昭和3年には、六田駅から現在の吉野駅間が開業し全通。続いて昭和4年には、地元資本により吉野駅から吉野山間のロープウェイが開業した。

昭和11年には「吉野熊野国立公園」に指定され再び脚光を浴びることとなり、昭和半ばにかけて吉野山は修行者、参詣者、そして行楽客で賑わった。

今は、多くの人出があるのは春の桜のシーズンのみになったが、昔は、大峯山寺の5月の戸開けから9月の戸閉めまで、各月に山上参りの修験者や「講」と呼ばれる信者の団体が吉野山から大峯を目指した。

また、戸閉め後は、紅葉のシーズンには、多くの行楽客で賑わった。

現在は、各地の「講」組織が高齢化の影響などで縮小し、参詣団体客が減少してきており、また、地元においても、都市への人口の流出と高齢化が進み、まちなみにも老朽化や空家が目立つようになってきた。吉野山の人口は、かつては2,300人あり、「修二会」などの行事の際には1kmを超える行列が続いたというが、今は約800人となっている。

## 地域自治会が主体となったまちなみ保全活動

吉野山は、国立公園として自然公園法、さらには文化財保護法の下にあるものの、規制に対してルーズになりがちで、まちなみの景観、そして山から望む眺望を傷つける事例も発生してきている。

また、吉野山は毎年桜のシーズンには観光客で賑わうが、近年、少子高齢化が進んでおり、今後の活性化がまちづくりの課題となってきている。

そこで、平成19年に「まちづくりモデルプロジェクト事業」として県の支援を受け、地元主体のまちづくりが始まった。

同事業は、県が、まちづくりの気運が醸成しつつある地区をモデル地区に指定、3年間に渡り、まちづくりルールなどの計画策定に対して支援するもので、県内では3例めである。

吉野山地区では、観光協会を通じ自治会や各種

吉野山まちづくり協議会



景観に配慮した道路整備



畿央大学によりまちなみの調査が進められている  
(写真提供：同協議会3枚とも)

団体に呼び掛けて「吉野山まちづくり協議会」（会長古澤登氏）を設立し、平成19年度から21年度にかけて、まず、まちなみと景観についてのローカルルールの策定を開始。そして、県がまちづくり支援のために創設した「なら・まちづくりコンシェルジュ」などの助言も得て、「吉野山景観保全まちづくり協定（素案）」を策定し、吉野山自治会に提出した。

22年度からは、国土交通省の「住まい・まちづくり担い手事業」の支援対象に選定され、自治会の全役員と、以前からの協議会参加者の一部を加えた構成で協議会を新たにスタートし、畿央大学などの専門家を交えながら、協定素案の内容を深めていった。

### ■「吉野山景観保全まちづくり協定（素案）」

当初の素案の内容の柱となっているのは、「吉野山まちづくり基本5カ条」である。

#### （1）精神性を重んじたまちづくり

「修験道」は、古代日本人の自然崇拜に始まり、道教や仏教の要素が取り入れられ発展してきた。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたことを契機として、そのような日本人としての精神性を今一度、全国、あるいは世界にフィードバックできたらという願いが込められている。

#### （2）法令の遵守

桜と史跡の吉野山、古くから修験道の道場とされてきた大峯山系は、歴史文化面でも自然景観面でも吉野熊野国立公園において重要な位置を占める。そのため、自然公園法、文化財保護法の下にあり、吉野山に住む住民として、あらためて法令の遵守を目指そうという決意を表明している。

#### （3）蔵王堂を中心としたまちづくり

吉野山のまちは、金峯山寺の寺内町として発展してきた歴史があり、まちなみは、今も歴史文化が連続と受け継がれている。そのため、吉野山の象徴ともいえる金峯山寺蔵王堂を中心として、寺内町の歴史文化の香りを湛えるまちなみの創造を目指す。

#### （4）眺望景観と借景

吉野山に存在するあらゆる建造物や自然景観が眺望と借景に大きく影響していることを理解し、景観保全を目指したルールを忠実に守る。

#### （5）広告物

広告物が、蔵王堂を中心としたまちづくりや景観眺望に大きく影響することを理解し、ルールを忠実に守る。

これらの基本条項と詳細項目は、協議会での話し合いにおいて、修正され、今年、23年1月には、自治会全戸に協定案に関するアンケート調査を実施。現在は結果を分析中であるが、8割方の自治会員から賛同を得たという。

### 世界遺産のまちに住む誇り

山並みの尾根道に沿った馬の背状の土地に発達した吉野山のまちなみは、「吉野建て」の特殊な形状である。通りからすぐ横が急斜面になっていることから、まちなみは、通りに面して1、2階建てにみえるが、斜面に沿って下に何階も建築されている。

そして、柿の葉寿司、吉野葛、吉野和紙、桜茶などさまざまな名物を提供する店や旅館が軒を並べ、まさに、1300年の歴史の重みを漂わせている。

平成22年、「平城遷都1300年祭」に呼応して、9月から約3カ月間、「蔵王堂」において、秘仏の木造蔵王権現立像3軀の特別開帳が行われ、約12万人の拝観者があった。また、吉野山旅館組合の発案で、宿泊者向けに夜間の特別拝観が催され、遠く関東方面からも多くの参詣客が訪れたという。

ほの暗い堂内で蔵王権現を拝しながらの説法により、より一層吉野の理解が進めばという考えで、金峯山寺側も了承し、地域と寺院の協調が進んでいる。

これらの自治会を始めとした地元の取組みは、住民が、紀伊山地の霊場を結ぶ参詣道に沿ってまちなみが形成され、まさに世界遺産の地に暮らすという自覚を持ち、自分たちが、吉野山の歴史文化を理解し、どう住むべきかを学ぶ機会となっている。

吉野山の歴史の中ではまだ始まったばかりと言えるが、休憩ポイントの設置や吉野山らしい木製の案内板・看板により木の地産地消を提唱し、また、空家の利活用にも積極的に取り組む方針である。（山城 満）